

「創造性」を高める

企業経営漫談士 岡野実空

『アイデアのつくり方』(ジェームス・W・ヤング著、CCC メディアハウス刊)は、「創造性」に関する不朽の名著。日本語版は、竹内均先生の解説がまた秀逸で、さらにお得感があります。その原理は、①アイデアは一つの新しい「組合せ」である、②それを作り出す才能は、事物の「関連性」を見つけ出す才能によって高められる、という二つ。またその創出プロセスは、①データ集め②データの咀嚼③データの組合せ④アイデア誕生⑤アイデア検証、です。今年、電通の現役(澤本氏、菅野氏)、OB(本田氏)の創造性スーパースター・トリオから話を聞く機会に恵まれましたので、今回は彼らをモデルに、創造性を高める「心技体」と、それを加速する「触媒」を考えます。(代表作:澤本氏=ソフトバンク・お父さん、菅野氏=リオ・オリンピック閉会式、本田氏=ぴかぴかの一年生)

心:「天真乱満」(好奇心の塊)

電通のスーパースター3 人に共通するのは、なんといってもまず、彼らの「天真爛漫」さ。それは「爛漫」という域を越え、「乱満」といえるほど。クライアントの課題を考える「特殊資料」はともかく、その解決に使うための「一般的資料」に関しては、一切タブーを設けず、気になること、知りたいことはすべて集め、咀嚼し、消化するという食欲さ。彼らの頭の事典には、「ムダ」という分類がなく、えっ?と面が白くなる「面白い」コトの満載。彼らの「心」の触媒は、森羅万象への「好奇心」です。

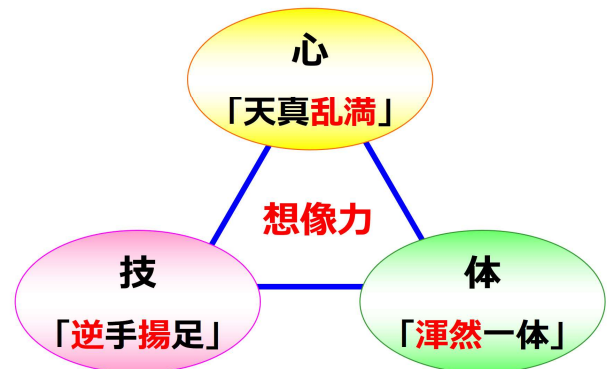
技:逆手揚足(「制約」は思考の梃子)

彼らの心に火が点くのは、クライアントの「制約」や「わがまま」。ふつうの人なら、できない言い訳の材料にする、ヒト・カネ・時間のハードルが上がれば上がるほど、いよいよ自分の出番!と、意欲が高まるヘンな人たちです。それは雑多な「一般的資料」の中に、考え抜いた独自のアイデアという豊富な「武器」の備蓄があるから。また彼らの得意技は、顧客の無理難題という「制約」を梃子にし、その「隘路」に独自兵器で集中砲火を浴びせ、顧客をねじ伏せる、「逆手」&「揚足」取りです。

体:渾然一体(「脳」は疲れ知らず)

「好奇心」の塊の彼らに、「一意専心」は無理。しかしその仕事は、この世に無限に存在する「知識の組合せ」という、生来移り気な彼らに最適なもの。しかも他の仕事や遊びが、よい気分転換になる連中ですから、その持続力はエンドレス。例えば本田氏の場合、原則金曜日の夕方には仕事を打ち切り、その夜から日曜午前まで2泊3日で遊ぶという、恐るべき疲れ知らず!彼らは皆、抜群のワークライフ・バランスを保っていますが、その本

KM 3-3 「創造性」を高める



質は「公私融合」。豊かなビジネス・キャリアと充実した私的な生活が「渾然一体」となって「創造性」を生んでいるのです。また時系列で見ると、先に遊んで気分一新し、平日の仕事を楽しむという「先遊後楽」。途中行き詰ったら、別の仕事で気分転換という「ストレスフリー」生活です。

創造性の触媒は、「好奇心」「渾然一体」、そして「制約」のトリオ。また「よつや」頭の彼らが特に鍛えているのは、カオスから何かを絞り出す「想像力」です。ここで古今東西の偉人たちに、その妥当性を語ってもらいます。「想像力は万事を左右する。それは美や正義や幸福を作る。それらはこの世の万事である」(パスカル)。「想像は知識より重要である。知識には限界がある。想像力はすべてを包み込む」(アインシュタイン)。「人生を恐れるな。人生に必要なものは、勇気と想像力と、少々のお金だ」(チャップリン)。

平成 29 年 8 月 14 日 実空